

せる報告の第一回分なるが如し即ち七月二十
六、二十七日、二十八日の重要な事件を報
じたるものなり露國司令官は日本軍の攻撃
く大損害を被せしむるを報じたるを稱す然
れども守備隊亦その三日間に四十名の將校を
失ひ下士卒千五百名の死傷者を出したるを
認せり此報告の後條光明に接したるは更に二
日を經過したるの後なりとす之によりて二十
六、七兩日の戦闘中日本軍七萬の兵及び多數
の攻城砲を失ひたるものと揚言する當日更に襲
撃は行はれたるにあらざるに攻圍全線に沿ひ
攻撃の繼續されたるに過ぎざるが如し要する
に更に決行的行動を試みるべき豫備なりし
ならんと雖も之が決行的行動につきては未だ
何等の發表されたるを見ず七月三十日午前四
時露軍は尙其勝利に酔へるに當りて曉光は
五箇師團の日本軍展開して狼山を攻撃せんと
し方に進軍中にあるを明にせり探り得べき限
りに依れば狼山の陣地はタイムスの旅順日略
圖に現したる水師營の村落を去るよと南半哩
にあり老虎尾岬角の尖端に近く艦隊の常に據
泊し居れる錨地より算すれば約六千碼なるが
如し丘高百八十呎丘頂に寺院あり此陣地既に
露國の本防線線を距るよと一哩の内にあり此
占領は即ち少なくも露國北方砲臺の一部露國

に征服されたるか或は一時沈黙せしめられた
るものなりとするを得べし狼山の砲臺は西標
高四百四十二呎オベリスク山より東標高約同
上ボヤ山に至る中間の峯谷を瞰制するのみ其
直接射界甚だ廣からずオベリスク山及びボヤ
山は共に露國本防線線の周界内にあるものな
りとす
二山は相距るよと半哩に達せざるも瀾斗状を
爲せる此狹隘なる隙隙よりして狼山の直接砲
火は港口の錨地に達すべく之より旅順口の港
口を射撃する亦難からざるに似たり東港及び
日本軍の成功は概して之を論ずれば即ち艦隊
を下すも能はずと雖も七月三十日に於ける
日本軍の成功は概して之を論ずれば即ち艦隊
を止るも能はずと雖も七月三十日に於ける
露國の防禦を二分し露軍東より西若しくは西
に東に其守備隊を移さんとするに露道に依る
にあらざるよりは皆日本の偵知を免る能はず
且つ之が射撃を避くる能はざるしむるものな
りとすすべしステツセル將軍我等に告げて曰く
敵軍隊非常に優大にして其陣地しかも微弱な
りしが爲め令して即ち軍隊は戦闘を行ふよと
なく之を次段の陣地に退却せしめたりと次段
の陣地と云ふは蓋し本防線線の間なるべし中間

に更に何等の陣地存せざるを以てなりステツ
セル將軍の稱して退却の整然として行はれ且
つ砲兵の射撃精密を得たるが爲め全然日本の
進軍を遮止するを得たりと云ふは我等の敢て
之を信せんを欲する所なり但し要は日本軍
既に其欲する陣地を得て又更に進まんとする
何等直接の意志を有せざるを以てなり
露國砲臺の近接射撃を受けて狼山を占領し之
に防備を加ふるは日本軍に取りて困難にして
且つ高價なりし業たらざるを得ず然れども此
業完全遂行され攻城砲亦之に上げられたる
が如し事は即ちアレキシフ提督十一日の電
報に港内の八月七日より十日に至る四日間攻
城砲に依り砲撃されたるを稱するに依りて明
なりとす東方正面に於て太孤山既に占領され
たるや如何我等は未だ通報に接せず若し既に
占領されたりとせば日本は露國軍艦の通達す
る各地點に對し十字火を注ぐを得るものなり
所論未完

明治三十八年九月廿三日 時事

○タイムスの日露戦争批評 (八十八)

八月十日の大海戦

(八月十五日所論つゞき)

艦隊は之が苦難を嘗めて三日間その砲火を支
へ是非なくして遂に意を決するに至りし此決
意は六月二十三日に之を行ふよと一或は寧
ろ當時其決意したる所を固守したるよと一
道に好都合なりしなるべし六月廿三日ウイッ
トフト(我邦の所謂ウイットゲフト)の海上に
出づるや東郷提督は巡洋艦十七隻、水雷艦
卅隻の外露國の六隻に對して其戦闘四隻を
有したるのみ尙は佛國に傳へられたる報に従
へば之を以て僅に三隻なりと爲せり然るに八
月十日の戦闘前一週露國の観測したる日本の
艦隊方は既に戦闘艦五隻、甲裝巡洋艦四隻、爾
餘巡洋艦十隻外に水雷艦四十八隻より成るを
示せり之に加ふるに露國側に於てはバン其
後に戦闘力を失ひ六月廿三日には尙は用ふべ
かりし小艦艇若干亦日本艦隊の其活動を休
めざりしに依りて最良の其効力を失ひたるも
のあらざるべからず斯の如くにして八月十日
に於ける成功の數は六月二十三日に比して明
に衰へたりとすべし軍艦亦既に三日間の遠

ふべからず且つ酬ゆべからざる砲撃を堪へ忍
びたるものなりウイットフト會て六月二十三
日に戦を行はざりしを辯じて數箇の理由
を挙げ内特に其斷を以て損害を少なくするの
道なりとするを云へり提督夫れ或は此所
言を悔ゆるの時ありしならん六月二十三日の
不決斷を以て畢竟露國海軍に大損害を齎した
る大失策たりしにあらざるは之を論斷す
るよと頗る困難なり八月十日の事件は或る度
まで六月二十三日に類似せり拂曉地平線上に
現れたる日本軍艦は僅に巡洋艦十一隻水雷艦
十七隻を算したるのみなりしも露國の全艦隊
その難苦を冒して盡く其港口を通過し得たる
前には東郷提督早く機に及びて之が警告を受
け其常の根據地にありて其豫期し且つ希望し
たる戦闘に對し之が準備を行ひ居たり午前十
一時頃露國艦隊は遂に外海に出で南方に航進
して旅順口の東南二十五哩に於て其敵と交戦
せり
斯くて悲き起されたる戦闘は甲裝軍艦ありて
より以來史上に於ける第一回の蒼海上の大艦
隊戦にして之に關し我等の聞知せる所は其主
要なる事態に止まる之が詳報は非常の興味を
以て待ち受けらるる所なり東郷提督の報告に
從へば露國艦隊は東方に於て其進路を遮斷さ

れ午後一時より日没に至るまで即ち七時間休
止するよとなく其戦闘を繼續せしめられたり
と云ふ
レトヴィン將軍將旗を掲揚せり近く封鎖を破
りて露國より旅順口に歸來せり一水雷艦に依
り同地に着たりとの説あるべしブラヅツフ
提督或は之に坐乗し居たるものならんウイッ
トフトはツエザレヴィツチにありウクトムス
キーは巡洋艦隊を司令してアスコルドにあ
り
東郷提督は敵の戦闘艦隊に旗艦レトヴィン
に對して其注意を集中せり提督ヨシフイッ
ンヤー氏に依りて唱道されたる主義即ち「小
なるものど戦ふ勿れ又大なるものど戦ふべか
らず唯だ須くイズレルの王と戦ふべし」と
云へるを遵奉したるものなり報に曰く兩艦隊
相迫つて三千五百米突の距離に入れり此決戦
的距離に於てレトヴィンに數回の着弾あり
同艦爲めに大損害を受けたりレトヴィン
戦闘艦の先頭に立ち居たるものなるを之を
想像するに難からずボビエダ二橋を失ひツエ
ザレヴィツチ劇傷を負へり戦闘時間の長さ、
對戦距離の短さ及び日本射撃の巧妙、砲臺の
効力等に顧みれば露國軍艦何れも皆大損害を受
けたるを疑はず日本は爲めに百七十名の死傷
者を生ぜしめられたりと雖も其軍艦は一も重

